

心と言葉をつなげる連歌創作指導

——「水無瀬三吟百韻」の鑑賞から創作へ——

黒 岩 淳

1 はじめに

国語の授業において、「書くこと」が益々重視されてきている。「書くこと」を取り入れた授業を充実させるためには、まず、生徒の書きたいという意欲を高めさせることが必要であると思われる。そのためには、感動体験を生徒にさせることが有効であろう。

さて、「伝統的な言語文化」の一つである「連歌」の創作は、生徒に言語活動を通して感動をもたらすことができると思われる。また、句を付けることで、友人と詩を共同で創作するという体験は、言葉の力を生徒に実感させる契機ともなりうるのではないかと考えている。

私は、福岡県行橋市の須佐神社で行われている連歌会に参加して二十数年になる。¹連歌会に参加して初めて感じることもできる面白さがあり、それを授業で生徒に伝えることが出来ないかと思い、何度か試みてきた。²古典の授業では、松尾芭蕉の発句に句を付けて表

八句を創作させるという実践をおこなった。³しかし、芭蕉の発句は、「俳諧連歌」の発句である。連歌の学習は、「純正連歌」から始める方がいいのではないかと考えた。そこで、今回は、「水無瀬三吟百韻」表八句を鑑賞し、それに句を付けさせていく授業を実践した。⁴

2 学習者と実践時期、時間数

学習者 福岡県立北筑高等学校二年生 分割授業クラス 二十名
実践時期 平成二十七年一学期 四時間
学習者は、普通科の生徒であり、ほとんどが四年生大学への進学を希望している。

3 教材 「水無瀬三吟百韻」

「水無瀬三吟百韻」とは、長享一（一四八八）年、後鳥羽院の二百五十回忌に、宗祇とその高弟の肖柏、宗長の三人が詠んだ「賦何人

連歌」の通称である。古来、百韻連歌の模範とされた。教科書は、三省堂『高等学校 古典B 古文編』を使用した。百韻なので、百句からなるのであるが、教科書に掲載されているのは、表八句である。また、『新総合 図説国語』（東京書籍）の季語一覧表を参照させた。

4 授業目標

- (1) 「変化と調和」という連歌の特質を理解させる。
- (2) 連歌創作を通して連歌の面白さを実感させる。
- (3) 連歌創作を通して句を鑑賞する力と書く力を向上させる。

5 指導過程

【一時間目】

I 「水無瀬三吟」表八句の鑑賞

(1) 形式・構成の確認

①各句の音数について確認させる。

五七五の長句と七七の短句が繰り返されている。

②形式の説明 百韻（百句）世古（四十四句）歌仙（三十六句）

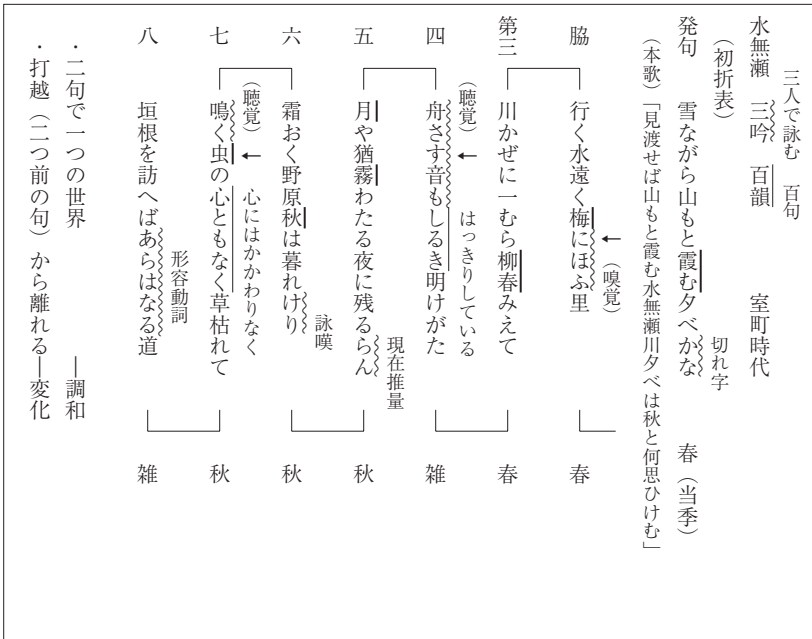
百韻の場合

初折 表八句 裏十四句 二折 表十四句 裏十四句

三折 表十四句 裏十四句 名残折 表十四句 裏八句

となる。懐紙にどのように書かれたかも、紙を折って示し、表・裏

板書



の説明をする。「奥の細道」の「面八句を庵の柱に懸け置く」という一節も紹介する。

(2) 季語の確認

連歌は、季語を含む「季の句」と季語を含まない「雑の句」に分けられる。季語を指摘させ、季節についても確認する。

一 霞む(春) 二 梅(春) 三 柳・春(春)

四 雑 五 月・霧(秋) 六 秋(秋)

七 虫(秋) 八 雑

式目上、春句、秋句は三／五句続けることになっており、夏句・冬句は、一／三句であることを説明する。

(3) 発句・脇句・第三の決まりごと

① 発句は、連歌会が開催されたときの季節を詠み込む(当季)。水無瀬三吟百韻は、「霞む」という季語があるので、春に詠まれたことがわかる。また、発句には、切れ字を使用する。「かな」が切れ字である。発句は挨拶句でもある。後鳥羽院の「見わたせば山もと霞む水無瀬川夕べは秋となに思ひけむ」(新古今和歌集)を踏まえ、春の夕べの感慨を詠むことで、後鳥羽院への敬意を表していることにもなる。この句は、残雪を詠みこんでいる点が新しい趣向といえる。俳諧連歌の発句が、独立して「俳句」になっていくという韻文の歴史についても触れておきたい。

② 脇句は、発句と同じ季の季語を使用する。また、「体言止め」にする。

③ 第三は、「て」止めが一般的である。前句に付けるのだが、発句から離れる必要がある。連歌では、二つ前の句(打越^{うちこし})に戻らないように展開することが肝要なのである。

(4) 展開の確認

まず、発句と脇句を合わせて鑑賞させる。雪が残っている山の麓に霞がかかっている遠景に、梅が薫っている近景を添えることで、立体的な風景が描かれている。次に、脇句に第三が付くことによって、梅が咲いている里に、川から風が吹いてきて柳がなびいている風景へと転じる。

さらに、第三に第四が付くことで、舟を漕ぐ音がはっきりと聞こえる明け方の川の情景へと変わっていく。第四に第五が付くと、夜、霧が立ち込めているので、音だけが聞こえてくるということになる。季節も秋へと変わっていく。第六が付くと、野原の情景となる。第六と第七では、秋が終わり近くなつたので、草も枯れたという内容となり、第七と第八では、草が枯れたので道も露わになつたと、前の句を生かした付けになっている。場所も、山↓里↓川↓野原↓道と変わってきている。

このように、句が付くことで、前に戻らず、次々と展開していることを生徒に伝えたい。四季を詠み、神祇釈教恋無常、様々なことを詠むことにより、連歌は人生を象徴することになる。また、同じ言葉が繰り返されたり、停滞したりしないように式目があることも説明したい。

(5) 句材の確認

連歌では、句材を分類し、それに基づき、句の連続や間隔に決まりがある。(今回の授業では煩雑になるので省略した。)

① 関係する句材を指摘する。

一 雪(降物^{ふりもの}) 山(山類^{やまがた}) 霞む(聳物^{そびえもの}) 夕(時分^{じぶん})

二 水（水辺）里（居所）梅（植物・木）

三 川（水辺）柳（植物・木）四 舟（水辺）明け方（時分）

五 月（光物・時分）霧（聳物）夜（時分）六 霜（降物）

七 虫（動物）草（植物・草）八 垣根（居所）

【句去り】（同類の句を隔てる数）

五句去り（間に五句を挟まなければならない）

水辺 居所 時分（夜と夜等） 植物（木と木、草と草）

動物（虫と虫、鳥と鳥、獣と獣）

三句去り

聳物 降物 光物 植物（木と草）

動物（虫と鳥、虫と獣等） 時分（朝と夜等）

（6）感覚的な表現の確認

感覚的な表現に注目させ、内容に広がりがあることを確認させる。

一 視覚 二 嗅覚（にほふ） 三 視覚 四 聴覚（舟さす音）

五 視覚 六 視覚 七 聴覚（鳴く虫） 八 視覚

Ⅱ 初折裏一の付句創作（小短冊に書いて提出）

「垣根を訪へばあらはなる道」に句を付けさせる。

この句から連想して、五七五の長句をつけることになるが、式目上、使用できる句材に制限がある。

①一旦、季の句が途切れたら、同じ季節の句は、七句、間を空けなければならぬ。したがって、春の句、秋の句を詠む事は出来ない。季の句であれば、夏か冬の句で作るということになる。季語を使用しない雑の句を続けることも可能である。

②二句前（打越）の句に、内容的に戻らないようにしなければならない

ない。具体的には、「鳴く虫の心ともなく草枯れて」の句と似た内容にならないようにすることである。「虫」という「動物」があるので、虫や動物は詠めない。「草」という「植物」があるので、植物も詠めないのである。

正式な連歌では、細かな式目があり、「神祇・釈教・恋・無常、名所」などは、冒頭の十句つまり、初折裏二句までは詠まない等、使用できる句材に制限があるが、生徒に創作させる場合、それらの点は許容して自由に創作させた方が良好だろう。

今回は、なるべく文語、歴史的仮名遣いで創作するよう指示した。文語で創作することで、文語文法への理解も深まると考えたからである。生徒の状況に応じて、口語で創作させても良いだろう。指示する際、連歌と連句との違いも説明しておきたい。純正連歌は、大和言葉が基本であるが、俳諧連歌は、俳言を自由に使用する。俳言とは、漢語や外来語、俗語などである。明治以降、俳諧連歌を「連句」と呼ぶようになる。

【二時間目】

（1）生徒が作った句（初折裏一）の鑑賞

生徒作品を事前にまとめて、プリントしておく。生徒作品の文法的な間違い等があれば、指摘して添削案を示した。

七 鳴く虫の心ともなく草枯れて	植・動
八 垣根を訪へばあらはなる道	居所
（付句）	
1 五月雨の降り続く日か家三軒	夏
	（添削案）
	降り続きをり

2	スイカ割り海で遊んで楽しいな	夏
3	ぼくたちを夏から守るかき氷	夏
4	そこで聞くにぎやかな夏の音が	夏
5	はつきりと見ゆる虹に心踊る	夏
6	進んだらトマトきゅうりになす畑	夏
7	雪が散る景色美し山化粧	冬
8	そこにある凍った池の魚たち	冬
9	白兔跳ねて雪に入りにつけり	冬
10	遠方に兎飛び交う姿見え	冬
11	勇ましき青竹売りの売り文句	
12	踏み入ると思いもよらず風そよぐ	
13	薄暗ささす木漏れ日と澄みる風	
14	行き進み振りかえ見ればわが足跡	
15	険しくも君に会うため今日も行く	
16	あらわれた山の木々たち立ち並び	
17	池がありさかんに泳ぐ魚あり	
18	木の間からぬける青空美しき	
19	寂しさが心にしみる月の光	
20	つみかさね自分の道に花咲かす	
21	見渡せばお菓子の家と小鳥のさえずり	

海に遊びて楽しめり
夏より守る
聞きたるは
かかれる虹に胸踊る
目の前に
雪の散る
いかならん凍りし池
跳ねつつ
飛び交ふ
思ひもよらず
森の中・澄める風
振りむき・足の跡
会ふため
高々と深山の木々は
池の中
木の間より
寂しさの心にしむる
飛ぶ小鳥

音数が揃っていない句や4・8のように「そこ」といった代名詞を使い、前句に寄りかかりすぎている句があった。文語や歴史的仮名遣いも難しいようであった。6・16・18・20は「植物」、8・9・

10・17・21は「動物」を詠んでいるので、「打越」に戻ってしまうことになる。事前の指示が徹底していなかったと反省した。

(2) 連歌実作

生徒の作品を鑑賞した後、その中から一句を採択。私の方で15の句を初折裏第一として採択した。恋の句である。(正式な連歌では、恋の句は初折裏第三以降にしか詠めない) 前句と合わせると、険しくとも恋しい君に会うため今日も出かけたところ、思いもかけず道が露わであったという内容になる。恋句は、生徒を刺激する。自由な発想を期待した。採択した句を懐紙(句を記入しやすいように罫線を入れたプリント)に写すよう指示する。

その後、初折裏二―五句までを実作させる。教室を座に見立てるわけである。生徒に小短冊(付句用紙)を数枚渡し、短句の付句を作らせた。机間を巡回して、小短冊を回収。十句程度集まったところで、一句を採択し板書する。「波越え求む崖の上の恋」という句を第二として採択することにした。前句の「険しくも」という言葉をうまく生かしている。「崖の上の恋」という激しい恋を思わせる言葉に、教室は盛り上がった。生徒には、採択した句を懐紙に写させる。気持ち切り替えて今度は、採択した句に、長句を付けるよう促す。幾つか提出された句の中から「舟を出し大海原をともに行く」を第三として選んだ。打越の第一句と「行く」が重なっているのが気になるが、前の句にうまく付いていると感じたからである。「ともに行く」のだから、既に恋は成就しているようだが、さらに激しいものを求めているのだねとコメントした。そして、第四については、全員創作することとし、授業時間内に出来なかった生徒は、放課後

までに創作して提出するよう指示した。また、句を記した未回収の小短冊もすべて提出させた。

八 垣根を訪へばあらはなる道

肖柏 雑

(初折裏)

一 険しくも君に会ふため今日も行く

亮太 雑

二 波越え求む崖の上の恋

野乃華 雑

三 舟を出し大海原をともに行く

迅 雑

【三時間目】

前回創作した句をすべて一覧にして紹介。鑑賞した後、第四は「きらきら光る私とあなた」を採択することにした。二十人を三〜四人の六グループに分け、初折裏の続きを創作させる。季の式目については守らせたが、その他の式目については、許容した。一人最低一句は付けさせ、終わらなかつた班は、放課後に提出させた。

【四時間目】

(1) 各グループの生徒作品の鑑賞

プリントには、生徒の作品を掲げ、その横に添削案を示した。三班ほど、紹介したい。

四 きらきら光る私とあなた

咲耶 雑

(A班)

五 よみがへるクリスマスにはあの夜が

航平 冬

六 涙とともに雪が降りたる

迅 冬

七 夜が明けてミズキの花が山に咲く

佳生 夏

八 さみしくひとり花をとりたり

迅 春↓雑

九 くるくると心奪はれバレリーナ

航平 雑

十 大空に咲くさやけき花火

佳生 秋

(添削案)

五 よみがへるクリスマスにはあの夜が

冬

六 涙とともに雪の降りたり

冬

七 奥山のミズキの花はいつ咲かん

夏

八 ひとりさみしく求め行きけり

雑

九 くるくると心奪ふはバレリーナ

雑

十 大空に咲くさやけき花火

秋

五「ミズキの花」の花は、夏の季語なので、六に付けるには、無理がある。しかし「みずき」に女の子の名前を掛けているらしく是非使いたいとのこと。そこで、「いつ咲かん」と推量の表現にすることにし、季移りとした。八の「花」は、前句の繰り返しにもなるし、また、連歌においては「桜」を意味する特別な言葉であり、春の季語にもなるので訂正。十「さやけき」は、バレエをしている女生徒の「さや」という名前を詠みこんだようである。

(D班)

五 氷上で走り回って汗輝く

礼二 冬

六 手を取りあつて華麗なステップ

晋也 雑

七 しんと降りつる雪は白染めて

未彩希 冬

八	白い兎が茶色に変わる	咲耶	春？
九	梅の木でホーホケキョとウグイス鳴く	礼二	春
(添削案)			
五	氷上を滑り回れば汗の出づ	冬	
六	冷えし手を取り軽きステップ	冬	
七	しんしんと降りたる雪は積もりけり	冬	
八	獣の毛色変はりゆくらん	雑	
九	梅の木に鳴くは鶯声高く	春	

五と七が冬の句なので、六も冬の季語が必要。全体的に音数が揃っていないので、訂正案は定型にしてみた。八「兎」は冬の季語なので、「獣」に変更。

(E班)			
五	いつからかはじまったのか想いあい	紗代	雑
六	染まる頬を空のせいにした	芽以	雑
七	最後だけ私に打たせて終止符を	野乃華	雑
(添削案)			
五	いつよりか始まりにけん両想ひ	雑	
六	染まりし頬は夕日の故ぞ	雑	
七	最後のみ我に打たせよ終止符を	雑	

五六は、音数をそろえ、文語にしてみた。恋の雰囲気はずっと続けたようである。

(2)「水無瀬三吟百韻」の続きの鑑賞			
一	山深き里や嵐に送るらん	長	雑
二	なれぬ住居 ^{すまゐ} ぞさびしさも憂き	祇	雑
三	今更にひとりある身を思ふなよ	柏	雑
四	うつろはむとはかねて知らずや	長	雑 (以下略)

時間があれば、紹介したいと考えたが、今回は省略した。

(3) ワークシートの記入

次の三項目について記入させた。

①生徒作品の中から、もっとも気に入った作品を選び、どこがいいと思ったのか、書きなさい。

②前句をどのように解釈したか、また、句を付けることで、前句と合わせてどのようなことを表現しようとしたか、書きなさい。(工夫したことがあれば、そのことにも触れること)

③連歌創作についての感想(句を付けることについて、友人の句、自分の句、連歌の魅力等)

まず、①について書いたものを紹介したい。

前句	くるくると心奪ふはバレイリーナ	雑
気に入った句	大空に咲くさやけき花火	秋
一人のバレイリーナの女性に恋した男性の心情で、その女性の華麗な踊りに心を奪われてしまったのかなと思った。また、次の句で、一緒に花火を見にさそうことができたのかなと思った。バレイ		

リーナに片想いしている一人の男性が想像できて良いなと思った。
(R・T)

次に②について書いたもの。

前句 舟を出し大海原を共に行く 雑

自作の句 きらきら光る私とあなた 雑

前句でも恋の句が続いていて、付句には壮大だけど二人きりである嬉しさや新しい場所に二人でドキドキしながらキyunキyunしながらいる姿を書いてみた。恋でのキラキラは私にとつては青春を表してくれると思ったから、「キラキラ光るわたしとあなた」にした。あとは、キラキラというところに太陽の光のことを表してみた。太陽の光が海に反射して輝いているのは本当にキラキラしていると思ったから。良い連歌になったかなと思う。(S・J)

③の感想を幾つか、分類して紹介する。

【コミュニケーションの楽しさ】

・皆考え方や想像することがバラバラで、同じ前句でも色々な句がつくれていておもしろいと思つたし、グループで連歌を作ることによって友達とも仲良くなれるし、コミュニケーションをとりながら楽しくできるというところに連歌の魅力を感じた。(S・Y)
・連歌は自分ひとりで考えるのではなく、前句があり、自分がどのような句を作るかで、またその後の物語が変わって行くので面白いなと思つた。それに友人の句を自分の句でつなぎ、また友人が

つなぐという、人とのつながりが実感できるものなんだと改めて思つた。自分が考えていた物語とは違う物語になったり、場面が一つの句で急に変わったり、今回の授業を通して連歌とは奥深いもので、人とつながることのできる、本当におもしろいものなんだと実感することができた。(R・T)

・歌を作る事も楽しかったが、私はやはり最後に皆で作った歌を連ねて見る方が楽しかった。人それぞれの個性が強く出ていたと思う。みんなの想いが直線上に並び、思い思いに表現して、みんな楽しんで見る点は、とても良い物だと思つた。たまには、こういう事をしてその人の知らない内面も知ったりできるので、やつてもいいなと思いました。(M・I)

【ストーリーの展開の面白さ】

・連歌は前の句に関連させた句を考えないといけないし、ルールもなんかあつて難しい。前の句に合うようにする「調和」と、打越(二句前の句)から離れる「変化」があつて連歌をつづけるのは想像以上に難しいものであつた。だが、しかし、一人で考えるのも班と一緒に作って行くにしても、どんな句がストーリーを作っている、自分に回ってきたらまた考え、また他の人の句をみてどんどん続くストーリーを楽しむのが連歌の魅力であると思われる。(R・M)

・前句にある言葉を使つてはいけないことは難しいと思つたけれど、一つ言葉を変えただけで雰囲気やその続きもかなり変わるのでおもしろいなと思つた。どんな展開に持つて行くかは自分たち次第だから色々個性があつてまた作つてみたい。(M・M)

【表現の多様性・それぞれの個性】

・前の人を作った句を自分なりの解釈で、またさらに新しい句を決められた語で表現するのは楽しかったし、友達が作った句を聞いて、その人それぞれのとらえ方や表現の仕方があり、さまざまでおもしろかった。(N・Y)

・連歌は難しいものだ。人となげてずっとつながっていくのはどんなものだろうと思っていたが、実際やってみると楽しくて一人一人の個性や考え方が歌に反映されて面白かった。連歌を作って行くうえで、季語のつなげ方のルールも身に付けることができた。春夏秋冬と雑があり、三句続ける決まりがあったりと始めて知ることが多かった。私は恋の歌が、見ていてなんだか気恥ずかしい感じがして、好きである。その人はこんな恋愛をしたんだなあとか、誰を今想っているんだろうとか、人の恋愛の歌は自分まできゅんきゅんできるので、もつと多くの歌を知りたいと想った。

(A・H)

・みんなの発想力に驚いた。恋の句がたくさんあって、でも、いろんな見方があって、表現の仕方があっておもしろいと思った。ルールがたくさんあったりとか、前の句に続けたりとかいろいろ意識すると書きにくかったりもしたけど、結構自由でいいんだなとみんなの連歌をみながら思った。誰がかいたかを知った上で連歌をよむと、その人の心情や気持ちが出てくるのかなと思った。グループでつくるのは難しかったし、時間が短かったけど、助け合いながらつくれたのは楽しかった。またいつか機会があればつくってみたいなと思う。(S・J)

6 評価の観点

授業目標と照らし合わせ、評価の観点を以下の通り設定した。

- (1) 連歌の特質を理解できたか。(知識・理解)
- (2) 積極的に句を創作し、面白さを実感できたか。(意欲)
- (3) ワークシートにしっかりと文章を書けたか。(表現)

7 成果と課題

評価の観点に添った形で成果と課題を考えてみたい。

(1) 連歌の特質

生徒の感想の中に、連歌の特質として重要な「調和と変化」について触れているものも見られたが、提出された生徒作品を見てみると、展開が十分になされていないものも多数見られた。ついつい前に出ている句に引きずられてしまうのは、自然なことで、意識しないと同じような句が続いてしまいがちである。式目は、そうならなための仕掛けであるとも言える。連歌において季語が重要な意味をもつことに気がついた生徒もいるようであった。

(2) 積極的な創作と連歌の面白さの実感

句を作る数は、生徒によって差が見られる。短時間に多数の句を作る者もいれば、苦吟してやっと一句を作る事ができた者もいる。感想を読んでもみると概ね楽しさは感じていたようである。

(3) 文章の記述

四時間目にワークシートに記入させたが、多くの生徒は、自分の体験を踏まえて、積極的に書いていたようである。しかし、「書くこと」を重視するならば、誰に向けて書くのか、どのように点を中心にまとめるのか、といったことを最初に明示しておくべきであった。そして、その文章を読み合う時間も設定して、意見を交わすことで、よりよい文章表現を考えさせることにもなるし、より深い理解につながっていくと思われる。

8 終わりに

今回、「書くこと」につなげるということを意識して、連歌の授業を考え、実践してみた。反省点も多々あるが、目標の設定の仕方によって、連歌の授業は様々な組み立て方ができるように感じている。例えば、文語で書かせることをもって重視するならば、古典のより深い理解につながるであろう。今回は二十人という少人数のクラスで授業を行った。四十人になるとまた違った工夫が必要になってくるだろう。

「言葉」をつなげることで「心」をつなぐ楽しさが実感できる「連歌」の魅力は、もつと多くの生徒に伝えたいという気持ちがある。私自身連歌の勉強を続けながら、よりよい指導法を考えていきたいと思っている。

注

1 行橋市須佐神社では、夏の祇園祭において、享祿三（一五三〇）

年より、氏子等により連歌が奉納され続けている。私が参加している今井祇園連歌の会は、毎月一回世吉連歌を卷いている。

拙稿「現代の連歌―福岡県行橋市須佐神社今井祇園連歌の会―」（数研国語通信「つれづれ」一七号・二〇一〇年）

また、行橋市では、平成十六年の国民文化祭の一環として連歌大会が開催され、中学生・高校生の座も三座設けられた。翌年から、教育委員会が中心となり、毎年、夏休みに市内の中高校生を募って連歌講座を二回開き、秋には県民文化祭の一環として連歌大会を開催している。学生座は五座設けられている。

2 今までの実践を一冊の本にまとめた。『連歌と国語教育―座の文学の魅力とその可能性―』（溪水社・二〇一二年）

3 拙稿「古典の授業において連歌をいかに指導するか―芭蕉の発句をもとにした表八句創作指導を例として―」（『月刊国語教育研究』四八八号（日本国語教育学会・二〇一二年十二月））

4 飯田洋氏によって、連歌教材化の研究が報告されている。

「高校における古典韻文への興味・関心を高める学習指導法について―連歌の教材化を中心に―」（昭和六三年度千葉県長期研修生研究報告）

また、光田和伸氏の次の論考も参考にした。

「連歌の『詠み方』と『読み方』―宗祇一座「水無瀬三吟」「湯山三吟」を矩として―」（『国際日本文化研究センター』『日本研究』第三六集・二〇〇七年）

（福岡県立北筑高等学校）